

神は自分の像に人を創造した。

(『創世記』一章27節)

聖書は自然のなかに占める人間の位置を特別なものとみた。人間は地のあらゆる生き物を支配し、地を従わせるために、神の像(かたち)に創造されたというのである。つまり、人間は「神の似姿」であり、自然の支配を託されていると考えた。

「神の似姿」については、これが具体的に何を意味するのか、旧約聖書はとくに説明はしていない。しかし、当時の西アジアで「神の似姿」といえば、王のことであった。王は、「神の似姿」として一般人とは異なる特別な存在とみなされていたのである。こうした背景に照らしてみると、「神の似姿」にこめられた旧約聖書の主張は明らかだ。王がではない。人間ならば誰も「神の似姿」である、というのである。人間の平等、人間の尊厳という思想がここから発達してゆく。

人間を自然の支配者とみる人間観については、最近では、それが今日の自然破壊や環境汚染を生み出した思想的元凶となった、と批判される。人間の幸福のために自然を利用し尽くしてもかまわない、という人間中心的な発想の根源がここにある、と。そうだろうか。自然の支配を託された人間には、むしろ、自然を守る責任と義務が課せられているのではないか。聖書は、人間のゆえに自然が呻いている、人間の悪のゆえに自然が荒廃した、と嘆く預言者たちの言葉をいくつも書き留めている。